

シンポジウム要約

スポーツミュージアム連携・啓発事業実行委員会では、平成27年10月10日に「これからのスポーツ博物館のあり方について」と題したシンポジウムを東京国際フォーラムで開催しました。

本シンポジウムは、巡回展「秩父宮記念スポーツ博物館巡回展：2020年東京オリンピック・パラリンピックがやってくる」と連動した企画です。

スポーツ文化の発信の拠点となるスポーツ博物館の存在意義や、わが国におけるスポーツ博物館設置の意義について、来場者の理解を深める機会を提供することを目的に、スポーツ史やスポーツ人類学が専門の筑波大学教授による基調講演をはじめ、スポーツ史の研究者や博物館・図書館関係者によるディスカッション、九州国立博物館の前館長の特別講演が行われました。

3連休の初日にもかかわらず、大学関係者をはじめ、博物館関係者、スポーツ団体など多くの方々にご参加いただきました。

■講演概要

基調講演：スポーツ博物館と Sport for All

登壇者：筑波大学 体育専門学群 学群長 真田 久 氏

ご専門であるスポーツ史とスポーツ人類学の立場から「スポーツというものがオリンピックなどの国際スポーツだけではなく、人類の歩んできた歴史の中に、生活と密接に関わる多様なスポーツがあり、若い人や健常者だけでなく、高齢者や障がいを持つ方など、それぞれの身体的な活動に合わせたスポーツが日々生み出されている。人間の側から、新しいスポーツを作り上げているのだ。」ということのスライドを交えながらお話しいただきました。

また最後にご自身が考えるスポーツ博物館について「単にスポーツ資料（モノ）を展示するのではなく、人の視点からスポーツを見て、人に合ったスポーツを創造していく、ということイメージさせるような博物館であるべきだ」と話されました。



1. 基調講演：真田氏



2. 会場内の様子

■シンポジウム（話題提供、ディスカッション）概要

テーマ：これからのスポーツ博物館のあり方について

登壇者：公益財団法人日本サッカー協会 日本サッカーミュージアム

コミュニケーション部 参事 小野沢 洋 氏

公益財団法人講道館 図書資料部 部長 村田 直樹 氏

国立科学博物館 事業推進部 参与 小川 義和 氏

中京大学 スポーツ科学部 教授 来田 享子 氏

司会進行：筑波大学 体育専門学群 学群長 真田 久 氏

博物館・図書館関係者やスポーツ史の研究者4名によるディスカッションの前に、サッカー、柔道、科学という異なる分野の博物館及び資料館の登壇者3名から、それぞれの館の概要や展示、収集方針、取り組み等について、10分ずつお話しいただきました。

日本サッカーミュージアムでは、2002年のFIFAワールドカップ日本大会を記念し、2003年にミュージアムがオープンしたこと、2006年にサッカー史を中心とした展示に改装したこと、併設のレファレンスルームで行っている調査・研究支援やサッカー関連資料の情報検索等について説明がありました。

講道館では資料館、図書館ともに所蔵資料は嘉納治五郎先生の所有物を基本としており（嘉納治五郎が柔術を修行した時に使っていた130年前の稽古着も所蔵）、その他の資料は国内だけでなく世界中から寄贈されたものであること、図書館での研究支援等を行っていること等をお話しいただきました。

国立科学博物館では主に博物館資源のオープン化や活用についてお話しいただきました。また、所蔵資料の秋田犬「ハチ」の剥製標本を例に、博物館側は日本人の育ててきたペットとしての秋田犬という側面で展示を行っているが、博物館の利用者にとっては秋田犬というよりも「忠犬ハチ公」という側面が重視され、また東大の博物館に保管されている「ハチ」の内臓標本は学術的な側面が重視されているなど、同じ1つの資料でも社会的価値、文化的価値、学術的価値など捉え方が異なるということをお話しされました。

次に博物館や図書館資料を通して学術研究を行っている中京大学の来田先生が10分間、利用者の立場から資料（史料）を探す上で苦労している点や、資料があっても活用ができない状況等について話され、これからのスポーツミュージアムに期待することとして、文書資料のデジタルアーカイブ化や資料の3D化に加え、所蔵資料の目録の連携管理等を挙げられました。

登壇者4名にそれぞれの立場からお話しいただいた後、司会の真田先生に促され各館の取り組みを例としながら資料展示やミュージアム連携についてディスカッションを行いました。また、参加者からの質問では、ディスカッションの時に話題に出たロス五輪（1932年）の体操選手のユニフォームの衣擦れ音に関して別の見解が示されるなど、

参加者を巻き込んだ良い盛り上がりでプログラムを終了いたしました。



3. 左から真田氏、小野沢氏



4. 左から村田氏、小川氏、来田氏

■講演概要

特別講演：スポーツ博物館設置の重要性、博物館連携について

登壇者：九州国立博物館 前館長 三輪 嘉六 氏

九州国立博物館の館長としてのご経験から「学校より面白く、教科書よりわかりやすい、来たくない人にも来てもらえるようなスポーツ博物館を目指すべき」と話され、「オリンピック憲章でも述べられているようにスポーツを教育と文化に融合させていくべきであり、スポーツを文化として体感する場としてスポーツ博物館が存在するのではないか」と述べられました。

また、「地域の郷土愛を背負いながら成長しているアスリートは地域の誇りであり、彼らの資料は地方の博物館や資料館が所蔵していることが多い」という点や「市民ボランティアの重要性」についても話され、「これからのスポーツ博物館は各地の地域博物館との連携や、ボランティアなど市民が参画するような仕組みを作る必要がある」とこれからのスポーツ博物館のあるべき姿について述べられました。



5. 特別講演：三輪氏